教育長が語る Leader's VIEW

第6回

15年間一貫教育で、どこに行っても通用する学力と故郷への思いを育む

千葉県 南房総市教育委員会 教育長 三幣貞夫

保育所・幼稚園・小学校・中学校を1つの「学園」として、一貫教育を推進する千葉県南房総市。地域事情を踏まえ、子どもが地域を出ることを前提として、学力向上と郷土愛の育成に力を入れている。その思いを三幣貞夫教育長に聞いた。

さんぺい・さだお　千葉県内の小学校教員、幼・小・中・高の園長・校長を歴任。2010年度から現職。教育再生実行会議の有識者メンバーも務める。

切れ目なき支援を目指し 保・幼・小・中を学園化

千葉県の最南端に位置する本市は、豊かな自然と人々の温かさに恵まれた地域である一方、社会・経済的基盤が弱く、少子高齢化が進んでいます。市内には大学がなく、就職先も限られることから、卒業後、本市に残っても離れても「どこに行っても通用する学力」と「どこに行っても支えとなる故郷への誇りと強い思い」の育成を重視した教育施策を展開しています。

ここ数年力を入れているのが、0歳～15歳の一貫教育です。子どもの成長は、年齢や学校段階で区切れるものではありません。乳幼児期から素直さや我慢強さ、協調性などの非認知能力の基礎を育んでこそ、小学校以降で求められる知識・技能を意欲的に粘り強く習得できるようになります。私自身、幼稚園・小学校・中学校・高校の園長・校長を務めた経験から、幼少期からの連続した教育の重要性を痛感しています。

本市は、子どもの数が少ないからこそ、個に応じた保育・教育が可能です。子どもの育ちに関する情報と対応体制を一元化させ、学校段階を超えて子どもの成長を支えようと考えました。

そこで、2013年度に保育所・幼稚園に関する部署を教育委員会に移管し、「子ども教育課」を設置。そして、中学校区内の保育所・幼稚園・小学校・中学校を1つの「学園」として組織化する構想を打ち出しました。2017年度には、保・幼・小・中を同じ敷地に集めた富山（とみやま）学園を開校。2019年度には、同様に嶺南学園を開校し、他の4つの中学校区も学園化しました。

規模をタテに拡大し、子ども・教員が切磋琢磨できる環境に

学園化には、子どもや教員が切磋琢磨できる環境を整えるために、学校規模の適正化を図るねらいもあります。当初は、同一校種の統合による規模拡大を検討しましたが、地理的な事情から統合が難しい地域もありました。そこで発想を転換し、異学年での交流を図る「タテ」に規模を拡大することにしたのです。本市の幼稚園の多くは、数十年前に小学校の付属園として設置されており、そのため幼小連携は以前から行われていました。そうした背景もあり、保・幼も含めた学園化は、教員にも保護者にもすんなり受け入れられました。

学園化に際しては、校務支援システムを一新しました。小・中では、子ども一人ひとりの出欠や評価、健康状態、家庭状況といった情報を記録して情報の一元化を図り、校種間で引き継げるようにしました。今後は保・幼にも拡大する予定です。

また、学校経営は校長に一任し、学校の自律性を尊重しています。目の前の子どもの課題を最もよく知るのは、学校だからです。例えば、学力向上策の一部については、各校が自校の状況や課題に応じて決めた取り組みに対して、市が補助金を出す形を採っています。校長がリーダーシップを発揮できるよう、1校あたりの任期を通常より長くすることも、教育委員会として留意している点です。

学園化は予想以上の成果を得ています。富山学園を見ると、特に中学生が、小さな子どもに見られているという意識を持つためか、行動が落ち着き、思いやりを持って周囲と接するようになりました。職員室を保と幼、小と中で合同にしたこともあり、教員の交流も進んでいます。互いに授業

を参観し、指導を学び合っています。

放課後の学習支援や食育で負の連鎖を断ち切りたい

「どこに行っても通用する学力」を育むため、すべての子どもの学習機会の確保にも努めています。本市は、交通の便が悪く、経済的に厳しい家庭が多いことから、学習塾や習い事に通えない子どもが大勢います。そこで、放課後や土曜日、夏季休業中に学習塾と連携した学習会を、各小・中学校で開いています。

さらに、小学5・6年生に対しては、市が配布する利用券を使って学習塾や文化・スポーツ教室などの受講が可能な「放課後教育サービス利用助成」などで、放課後の学びを支援しています。助成回数や金額は決して多くはありませんが、学びに向かう姿勢を身につけたり、自分の可能性を発見したりと、自ら学ぶきっかけにしてほしいという思いがあります。

また、「日本一おいしいご飯給食」を目指し、食育にも力を入れています。本市では、故郷への誇りと強い思いを育むため、「総合的な学習の時間」や特別活動と各教科等を関連させながら地域を学ぶ「南房総学」を行っています。その一環として、給食は地産地消にこだわり、地元米を使った和食中心の献立にしています。

家庭の状況が厳しくても、学習の機会を保障したり、学校給食を通して健康によい食生活を提案したりすることで、子どもたちの自立を後押しし、負の連鎖を断ち切りたいというのが、私の思いです。

目の前の子どもに対してすべきことを今すぐ行動

子育てと教育は市の施策としても重点が置かれ、厳しい財政の中でも教育の予算は十分確保されています。ただ、それに甘えず、新しい施策を行う際には他の施策を見直し、予算総額を増やさないように工夫しています。

限られた条件の中で質の高い教育を提供するためには、職員が力を発揮できる環境づくりが欠かせません。教育委員会の全部署をワンフロアに集約し、全体を一望できるように棚などを低くしました。これにより、職員間の対話が増え、情報共有がしやすくなり、情報・対応の一元化が図られています。

今注目しているのは、OODA（ウーダ）ループ*の考え方です。子どもは日々成長しています。エビデンスに基づいた教育を行うとともに、目の前の子どもを観察して課題を見いだし、すべきことを決めてすぐ行動し、その結果を観察して次の指導を決める。そうしたスモールステップの積み重ねが、数値だけでは評価できない資質・能力を育むことにつながると信じています。

千葉県南房総市 プロフィール

◎ 2006年、6町1村が合併して誕生。三方が海に面し、その海岸線は南房総国定公園に指定される一方、県下最高峰の愛宕山を擁する自然豊かな町。温暖な気候を生かした果樹農業、花卉（かき）、酪農が盛ん。「道の駅とみうら」は全国モデル道の駅の1つに指定された。 **人口** 約3万8,000人 **面積** 約230㎢ **市立園・学校数** 保育所5か所、幼稚園6園、小学校6校、中学校6校 **児童・生徒数** 約2,200人 **電話** 0470-46-2961（教育総務課） **URL** http://www.city.minamiboso.chiba.jp/

＊ アメリカで生まれたビジネスメソッド。Observe（観察）、Orient（状況判断、方向づけ）、Decide（意思決定）、Act（行動）の頭文字を取ったもの。予測が難しい中、状況に応じて意思決定を行うためのメソッド。